

吉岡実次 1921 年（大正 10 年）生まれ

94 歳で亡くなった祖父が 78 歳のときに孫（私の従姉妹）に向けて綴ったものです。

戦争体験を聞くという宿題が出たそうです。

祖父が亡くなり、私の母が実家で見つけて来て、読んで欲しいと祖父のがカレンダーの裏紙に書き綴った直筆のコピーと、それを誰かが簡略化してくださった、読みやすくされたものを渡されました。

それまで祖父が兵隊だったことも知らずにいました。

今ある命が奇跡的に繋がっているものだと知り、身震いしました。

伝えたいと私に託した母も、2 年前 70 歳で亡くなりました。

眠っているにはもったいないほどリアルな当時の空気が伝わる手記です。ご興味のある方には是非読んでいただきたいと思います。

鳥井未来

昭和 17 年 7 月、外地に出発ということで、夕方部隊営庭に集合しました。3 月に入隊して 4 カ月の基礎訓練と特業（専門）訓練が終わったところです。

私の兵種は飛行兵でした。飛行兵は大きく分けて空中勤務と陸上勤務があります。細かく分けると、操縦、機関（整備）、高射機関砲、高射機関銃、有線、無線、暗号、気象、自動車、毒ガス、爆弾、地上警備などがあります。

私は地上警備でしたが、外地へ渡ってから高射機関銃に変わりました。敵の飛行機を撃つ機関銃です。部隊から夜中にトラックで浜松駅まで運ばれ、列車に乗り込み、窓は閉め切って外は全く見えません。面会は出来ません。行き先も知らされません。発車したのが確か夜の 1 時から 2 時頃だったと記憶しています。途中京都、大阪、神戸と停車しました。どうやら窓の外には面会に来ている人たちの声の様です。わが子の名前を呼ぶ血をしばるような声がします。軍事機密ですが、色々な手段で家に知らせた者が結構いたようです。

乗船は呉港近くの宇品港でした。宇品に着いて初めて明らかになったのですが、車窓を閉め切ったのは各駅停車で家の者と面会を禁止するためだったのです。乗船しても未だ行く先は不明です。海が荒れて時間がかかり、1 週間くらい経ってから上陸でした。上陸して初めて志那（中国）ということがわかりました。上海近くのウースンという港でした。船内の 1 週間の間の生活は今の人には信じられないような事ばかり。

眠るのは船倉の床に竿を並べたように雑魚寝。食事は大きな窯に湯を沸かし、米は研がずに入れて蒸気で蒸して出来上がり。副食は馬鈴薯と玉ねぎの皮をむかずに切って煮たもの。梅干しは代用品の青いスモモを漬けたもの1個。毎日まいにち、三度さんどこの繰り返しで全くうんざりでした。お腹は空いても船酔いで食べ残しばかりでした。

上海で部隊ごとに別れて任地に向かいました。私は列車で南京へ運ばれ、宿舎に入りました。今度の列車の旅は窓が全開。広々とした大陸。寿命が延びるような気分でした。大陸性の気候のせいかもしれないものすごい暑さです。市内はアスファルトで舗装された道路が、極端なところはふわふわしてあんこ入りの餅のあんこが飛び出る様に、割れ目から柔らかいアスファルトがにじみ出るような状態です。特に石炭を満載した軍用トラック、バスなど思い自動車が通るとタイヤの跡で浅い溝が出来るところもあります。

任地部隊でしばらく訓練を受けて各々分担を決められ、私は部隊、飛行場、軍用施設の警備です。飛行場の警備についたとき、一生忘れることの出来ない事態が起きました。丁度昼頃の食事時でした。私の受け持ちの高射機関銃は3人が1つのグループでした。1人は食事に行っていました。射手の私と弾を銃に込める役目の弾薬手の2人でした。突然、警戒警報なしの空襲警報です。真正面から敵飛行機の爆撃と機上掃射です。私は無我夢中で撃ちました。隣にいた弾薬手があっという間に倒れました。

それでも私は弾薬の続く限り撃ちまくりました。10 秒か 20 秒の間だったでしょう
か。敵飛行機が去りました。弾薬手は即死でした。食事に行っていた 1 人も帰って来
ました。正気を取り戻したと思った途端、その兵隊が大声を上げました。「おい！ 吉
岡！ 大丈夫か？」私は何の事かさっぱりわかりません。横腹から血がにじんでいると
言うのです。すぐさま上着を脱いでよく見ると、左右 2 カ所に敵の弾丸がかすって血
が出ていました。痛みは感じませんでしたが、気持ちが落ち着くにつれて痛くなって
きました。すぐに手当てを受けて、戦死した弾薬手の補充も受け、任務続行です。気
が立っているので、1 人や 2 人死んでも何のこともありませんでした。飛行場の方は
大きな被害はありませんでしたが、トラックが 1 台炎上していました。運が良かった
のです。私の体が左右 10 センチ位片寄っていたら、この世からさよならでした。今も
横っ腹を見ると弾丸がかすったヤケドの様な跡があります。これを見るたびに当時の
ことが浮かんで来ます。自分自身の体に刻んだ従軍記念です。

この後、北支（現在は華北）に移動し同じような任務についておりましたが、終戦
は北支で迎えました。12 月に北支へ行きましたが、寒かったです。部隊の入浴場が兵
舎から 100m のところにありましたが、入浴に使ったタオルが兵舎へ帰る途中でカチ
カチになり、半分に折れる状態です。

復員は北支の天津近くのタークーという港から乗船しました。終戦と同時に手のひ
らを返したように命が惜しくなりました。船はアメリカの船で乗組員は全員アメリカ

人。乗船中の3日間は牛や豚の日常のような時間でした。アメリカ人が非人道的というのではなく、設備が兵員に対して不十分のためです。アメリカの船、アメリカ人の船員、何処へ連れて行かれるのか毎日不安と恐ろしさでいっぱいでした。

九州の佐世保港の近くへ上陸したのですが、九州の山々が見えてくるなり、やれやれと感謝感謝です。この時の気持ちはちょっとやさっとでは表現出来ません。佐世保―門司―広島―大阪―京都―舞鶴―丹後神野と帰ったのですが、広島へ着いたとき、広島で降りる16、17歳の若い兵隊が大声をあげて泣くのです。広島市といえども何も無いんです。ご存知の通り、原爆の跡です。かわいそうというか、切ないというか、持っていた米1袋全部を思わずその兵隊に与えました。（佐世保を出発するとき、玄米1袋と塩、砂糖少々が支給されました。）田舎へ帰れば米は充分あると思っていました。

帰ってみたら皆元気でおりましたが、腹いっぱい食べるものがない。農業をやっても食料不足。日本の戦力基盤のもろさがしみじみとわかりました。しかし、家内一同の喜び様は大変なものでした。ご想像にお任せします。

将来ある若い兵隊が自己の意思によることなく、国のために、子孫のためにと教えこまれて昇天していった彼ら、よりどころなく彷徨っていないだろうかと。運に恵まれ

今ある自分自身。ボケが始まりかけた 78 歳の精一杯の気持ちを綴りました。入営から
復員まで 3 年 9 カ月の中で、脳裏から離れない 1, 2 点です。

若いて素晴らしい。若い力を精一杯振り絞って、将来に向かって良い方向に羽ばた
いてください。